

「叱られない関係」のもと、自己選択場面が用意され、その自己選択が二者関係（支援者と本人）に安定した快経験を生み出すようになる頃には、本人の自己主張への自信は少しずつ回復し始めます。「こんなことを言っても駄目だ」「こんなことは考えてはいけない」といった絶望と諦めの否定的な自己像が、次第に「この自己選択を認めてくれるのだったら、きっとあの自己選択も認めてくれるに違いない」といった、後の肯定的な自己像の形成に結びつくような希望や期待に入れ替わっていきます。そして、そんな自信を背景にして、出すことができなかったイヤが、いよいよ周りの支援者や家族に伝えられることとなります。そして、こうして出現したこの時期のイヤは、できる限り本人の主張を丸ごと認める形で受け止める必要があるのです。なにせそのイヤは、今ある勇気を全部振り絞り、ひょっとしたら100%否定されるかもしれないリスクを越えて発せられた行為だからです。ここでこのイヤを認めないことは、やっと出たかたつむりの角を強く叩くようなものです。そんなことをしたら、かたつむりは二度と角を出すことはしないでしょから、その仕打ちの残酷さはどなたにでも想像できると思います。叱られ続け、主体性が退行してしまっている心は、非常に傷つきやすい状態にあるのです。

いつでもどんな時でも母の排泄の誘いを絶対に断ることがなかった（しかも40年もの間）K子さんは、ある日、母親の排泄の誘いに手すりの棒をしっかりとつかんで明確な拒否を示しました。また、どんな時でも帰園時には、聞き分けよく送りの母の車からスッと降りてきているY子さんが、嫌々降りて来たなと思ったら、玄関先でひっくり返ってバタバタ身体をのたうち回らせて、初めて帰園を拒否しました。これも40年で初めてのことです。こんな時、このイヤを心の成長の証として私たちは100%受け入れる必要があるのです。

「そうだよね。オシッコ行きたくない

ときって誰でもあるよね。いつまでも子どもじゃないんだから、任せて欲しいよね」とか「学園に帰って来たくないのは当たり前だよ。前からずっと思っていたんだよ。よく伝えられたね。今日は、もう一度お家に帰って、もう一つ泊まって、あしたまた学園において、出直した」とか、…ね。

このイヤを受け止めていく大切さは、育児におけるいわゆる第一反抗期の受け止めの大切さと同じです。貴重なこの時期の自己主張を認めていかなくては、自分の人生は自分で決めていって良いんだという絶対的な自己肯定感を育てていくためのチャンスを失うこととなります。せっかく自己選択を応援する支援を開始しながら、一方で出現したイヤを認めないのではバランスを欠くのです。

しかし、今までニコニコして参加していた作業活動を拒否する、嬉しそうにやってくれていたお手伝いを拒否する、こんな行動に出会うと、今まで良い子だと思っていた方が悪い方向に向かい始めていると心配になったりしてしまいます。しかし、一貫して適切な支援を提供し続けることができれば、その心配には及びません。その方にとって今までなされてきた作業活動やお手伝いは、やらないと怒られるから、あるいは、やらないと嫌われてしまう恐れがあったからに過ぎないのです。自分が働きがいを感じるから取り組む作業活動、本当に思いやりの心から発するお手伝い、そんな世界に私たちは彼らを連れていく責任があります。叱られてばかりの心は、人の顔を窺うことを覚えさせます。人間の生き方としては、最低の生き方です。私たちの仕事は、人格を育てることです。自分は大切にされたと感じる心が他者を大切にすることができます。いつでも見守ってくれている人がいると思う心が頑張ることができる心を育てます。「叱らない関係」を基盤に「自己選択・自己決定」の機会をつくり、そして「イヤを受け止めていく」、これで人格形成の基礎を固めることができます。